

おはようさん

第12号

わたしたちは躰といういささか古びた言葉を持ち出し伝統と文化の町京都において今も息づく「躰」や「訓え」に学び語ることから新しい子育て文化を提唱します

京都の躰を語る女性の会

〒616-0022

京都市西京区嵐山朝月町68-8

京都府神社庁内

TEL 075-863-6677

FAX 075-863-6665

<http://www.net-k.co.jp/situke>

幸在祭 (さんやれさい)

京都市登録無形民俗文化財

上賀茂神社/大田神社

地域をあげて祝う少年たちの元服祭
数百年続くお囃子が町内を練り歩く

上京区・上賀茂神社の氏子町に、
今も残るさんやれ祭。毎年二月二十
四日に執り行われるこの祭事は、数
え年十五歳の少年が主役となる。彼
らは「あがり」と称され、当日は大
島紬の羽織着物に黒足袋、下駄、白
いマフラーと手袋という出で立ちで
町内を練り歩きながら上賀茂神社・
大田神社・山の神に大人の仲間入り
を奉告する。

江戸初期より執行されてきた元服
儀式（本来は農耕祭事や神幸祭など



町内を練る一行

複数の要素が混然一体化した祭とい
う見解もある)で、「あがり」の子
はこの日から里の仕事、祭事、町内
行事すべてにおいて一人前の男とし
て扱われた。
巡行コースは、午前十一時頃各町
の宿をスタートし、山の神、大田神

社、上賀茂神社に参拝。本殿神前に
て大人の仲間入りを報告祈禱した後、
各町の宿へ戻る。

行列の先頭は大将木(幣を吊した
青木)を持つ未成年の子、次が磨り
鉦を首から下げた十四歳以下の副大
将、そして「あがり」という順に
続く。「あがり」が締め太鼓をドン
ドンと打ち鳴らすと鉦がチャンチャ
ンと合わせ、時折「おーめでと、
ごーぎーる、どっこい」と節を付け
て囃しながら歩を進めていくのだ。

一週間前からお囃子の稽古が始まる

二月中旬といえはまだ吐息も白い
底冷えの京都。学校から帰宅するや
いなや神社へ向かい、夕刻から夜の
八時過ぎまでを仲間と過ごす。練習
の後は境内でひと遊びすることが許
されるといふ。異年齢の子と遊ぶ機
会が少なくなり、縦社会のルールも

稀薄になった現代っ子たち。かつて
あった鎮守の杜の原風景が蘇ったか
のような錯覚を覚える境内に、子ど
もたちの喜々とした歓声に解き放た
れたつかの間の自由が映る。

当屋の主婦は大忙し
「食材から味付けまで覚え書きだけ
が頼りです」

現在では上賀茂各町五グループ(川
原・山本・中上路・南大路・東)に
よって構成されている。代々農家を
中心とした「サンヤレ講」が組織と
なり、長
老・老人
・中年・
若千代子
供に区別
され、各
町内ごと
に「当屋」



盛り返された朝食のお膳

(あがりの子の家)と宿が決められる。

当屋に選ばれた家は簡単な覚え書きをもとに一連のお世話を担い、期間中は参列の子どもたちのご馳走を用意し、接待も勤めなければならぬ。

当日の朝食は、お食べ初め時に作った名入りのお膳に、紅白なます、カマスの干物、小豆と豆腐の従兄汁、煮しめ、赤飯が盛りられた。

どの器にもてんこ盛りにつけて持ち帰らせる「盛り返し」というもてなしを正當とする慣わしが今も残る。

以前は当屋の中から宿が選ばれ、前日大勢の子どもたちを泊めたりもしたが、住宅事情も手伝ってか、今はほとんどの町内が廃止しているという。

少子化から

「あがり」の子がいない年も

現在では当屋を決めるのも一苦勞で、宿がない年は自治会館から出発することになっている町内もある。



簡略化、簡素化は致し方ないとしても、親から子、子から孫へ伝承されてきた貴重な芸能・文化の灯を絶やさずことなく保存し続けていかれることを祈りたい。

今年の「あがり」の一人、戸田賢太朗君(13)。「緊張しました。これからは大人の仲間入りをした自覚を忘れないようにしたい」と感想を話してくれた。

一度のミスもなく立派に副大将を務めた子どもたち(9)。「あがり」を終えても練習稽古の場には顔を出します。「戸田君の毅然とした言葉には、しつかりと受け継がれた地域との結びつきが感じられた。」



子育て支援から次世代育成支援へ

日本の子育てシステムが変わろうとしています

○新しい法律ができた

次世代育成支援対策推進法が十年の期限立法として制定され、平成十六年度中に行動計画を策定し、十七年度実施することが、地方公共団体や事業主に義務づけられました。これとともに児童福祉法も改正され、従来は特定の条件下の子どもたちが対象でしたが、すべての児童を対象としたことが改正の大きなポイントでした。育児不安や虐待、家庭内暴力、不登校、学級崩壊、少年犯罪の低年齢化などの諸問題と、少子化が、今回の法整備を急がせた面は否定できませんが、本来の趣旨は子育ての社会化です。

○母子カプセルって何？

たとえば育児不安ですが、子育てに悩まない親などいません。だれでも親業は素人としてスタートするのですから、わからないことだらけです。産院や保健所、あるいは育児雑誌など情報はいくらかでも入手できますが、「ちよつとしたこと」に答え

て貰ったり、「それでいいのよ、頑張ってるわね」と励ましてくれる人を身近にもたないために、不安は増大しストレスとなり、育児ノイローゼにまで至ってしまうのです。「公園デビュー」も人と関わる力が不足する親子をいいましたが、今は「母子カプセル」といわれ、いよいよ母親は子どもと閉じこもって誰にも相談できず、子どもは、子どもが育つために必要な他児との関わりが極端に少なくなつて社会問題化しています。



○オヤコ成り

↳その擬制的親子ネットワーク

日本には、子育てを地域で支えるさまざまな仕組みがありました。妊娠すると戌の日に腹帯をくれる「帯親」、産まれれば名前を付けてくれる「名付け親」、母乳をよく飲みますようにと、おっぱいがたくさんで女性の乳首を口に含ませて貰う「乳親」、お金持ちの家の前にわざわざ捨て子して拾ってもらう「拾い親」、他にも「守り親」、「里親」、働かずにあれば「親方」など、血の繋がらない大勢の義理の親に囲まれ、助けられて子どもは育ちました。このような仕組みは「オヤコ成り」とよばれていました。赤の他人が互いに義理の親子関係を作ることによって、つきあいは深まり、誰もが気軽に子どもに声をかけ、困ったときには助け合っていました。このような義理の親のネットワークは、まさに子育てが社会に開かれていた姿そのものでした。「子どもは神様から授かり、村へ返すもの」と言われ、村落共同体の財産でした。子どもは親だけのものではなかったのです。

○少子社会の到来

少子高齢化社会の到来により、将来（おそらく二十年後くらい）の労働

植物に学ぶ

紫木蓮薫る頃、精華町の環境グループからお誘いを受け、子どもを対象とした自然観察会に参加する機会に恵まれました。

数人の大人と子どもたちがグループに分かれ、学研都市内の自然公園を散策。発見したもののや感動したことなどをデジカメで撮影し、後でマッピング編集するというものです。中継地点にGPS装置を配置した、いかにもハイテクタウンらしい企画内容に興味津々。

引率は積水研究所の若い樹医さんです。植物のことは勿論、虫や鳥のことも詳しく、その博学さに「へ〜っ」と感嘆することの多かったことといたらありません。四十路半ばにして、改めて自然界の巧みな仕組みに脱帽したのを感じます。

今も心に残っているのが、植物は風に吹かれることで自分がどちらに根を張ればいいのか体得していくというお話です。つまり街路樹などに多く見られる足元に施された突っかえ棒は、自然界のルールからすると不要のものということになるのでしょうか。

人間とて同じこと。「転ばぬ先の杖」とは申しますが、我が子可愛さから与えるタイミングを考えなかつたり、あまりに頑強であったり重すぎたりする杖はいかなるものでしょう。

植物界から人間界に、再考の余地ありと手が挙がっている気がいたしました。
(比良みかん)

働力や年金に不安が生じ、「安心して子どもを産み育てることができない社会」の実現が声高に叫ばれていますが、少子化傾向の原因は、安心して子どもを産み育てる環境が不十分なことだけではありません。晩婚化（初婚年齢の高齢化）と非婚化（生涯結婚しない）、意図的に子どもをもたない夫婦（ダブルインカムノークィズ）の増加が、少子化傾向の真因といわれています。

晩婚化は、女性の出産可能年齢期を短縮し、非婚化は出産の機会を少なくします。欧米に比べ未婚女性の出産率が極端に低いためにそうなるわけですが、ではなぜ今の若い人たちが結婚や出産に躊躇うのでしょうか。

○傷つけたくない、傷つきたくない

血は水よりも濃いといいますが、親子の関係ほど密なものはなく、まさに「切つても切れないもの」です。その関係を厭うことは、ヒトという種の危機です。ヒト以外の生き物はすべて子孫だけしか残すことができず、お金も文化も後世に残すことはできないのです。色々なものを残せるヒトが、もつとも大切な子孫を残そうとしなくなる、それはあまりに異常な事態だといえます。



人と関わることは、ときには「傷ついたり、傷つけられたり」するものですが、だからこそつき合いも深まり、信頼も増すというものです。男女が出会い、恋をし、心身ともに求め合い、愛し合う結実として、子宝に恵まれる。その誕生を多くの人々が祝福し、ともに育て合う。この当たり前のことの回復によって、私たちはもう一度「人と関わる力」の回復を目指さなければなりません。

本誌の特集「幸在祭」は、十五歳男児の成人を祝う通過儀礼ですが、「人と人が関わる力」が、親にも子どもにも求められる風習でもありません。このような仕組みを喪失した現代社会は、法制化によってその機能を模索し始めたのでしょうか。

（岩屋神社宮司 室田一樹）

コンサートの「案内」

平成十五年十一月一日、河内長野市で起きた十八歳と十六歳の二人による一家殺傷事件の第二報に接して、その動機の不可解さと行動の不気味さに戦慄を禁じ得なかった人は多かったことと思います。日本の神話には、出雲大社に鎮まる大国主命にまつわる通過儀礼が多く描かれていますが、その一つに、大国主命と須世理姫が、姫の父神に結婚を許されるまでのさまざまな試練があります。破滅への恋路を急いだ河内長野の二人と、父神の試練に耐えて結ばれた二神。その結末はなぜこうも違うのか。

「人を殺してみたかった。家族なら殺しやすいと思った。二人だけになるには家族を殺すしかないと思った。二人だけになってひととき一緒に暮らしたら、心中しようと思っていた」。自殺願望をもつ二人が共有してしまつた「死の神話」には、二人の「生」を下支えするだけの力はなかったのです。

来る七月十一日に開催予定の当会主催「おがたまのきコンサート」思い思われふりふられのテーマは、「いい恋しよう！」です。詳細は同封チラシをご参照下さい。多数の皆様のご参加を心よりお待ち申し上げます。

編集後記

平成十一年四月十七日、祇園の八坂神社で「京都の躰を語る女性の会」の発会式が行われてから、丸五年が経過しました。これまで本当に多くの皆様のご協力により、活動が続けられましたこと、厚く感謝申し上げます。

京都はいろいろな顔をもつ町ですが、当会はその職人文化にスポットを当て、そこに伝わる躰や訓えに学んできました。今年からは少し方向転換して、京都のもうひとつの顔である習俗や行事・祭事に目を向け、日本の子育て文化を尋ねたいと思います。

加えて「おがたまのきコンサート」も当会の重要な活動のひとつとなりました。重ねて皆様のご理解ご協力を、切にお願い申し上げます。

また、紙面の都合上、平成十五年十一月二十八日に下鴨神社において開催されました例会、「マツリの伝統を支える女性たち」の詳細を報告することができませんでしたことを、お詫び申し上げます。

（ム）